ユウキの転生物語

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユウキの転生物語

【Ｎコード】
Ｎ４３８９Ｘ

【作者名】
杏

【あらすじ】
家でくつろいでたら父さんとポケモンの世界へと転生してしまった、
しかも転生と同時に服装も変わってるし、父さんはジムリーダーになるわ、家は既にあるし隣の春川という女の子は告白してくるし、モスギスは訳分かんねーし、同級生も転生してるし、一体どうなってるんだよ！
注！　もちろん描写は無いです。

第1話　ユウキ（前書き）

俺の同級生の石垣登場！
皆さんは知りません、きっと、

第1話　ユウキ

俺は石垣ユウキ、
ちなみに中学生、

「おい！　いっせい、昨日の試合だめじゃねえかよ。」
「昨日は裏で引っ張られたんだよ。」
「ふーん。」
「で、おとといのＦ１凄かったよな！」
「ああ！　そうだな、あれは衝撃的で…。」

こうして昼休みが終わった、

部活から帰った、そしてテレビをつけた、

パチッ

「おっ、高校野球の試合か。」

○○高校対○◆高校

「ちょっと見ておくか。」

＊

「さあ始まりました、実況私◆∇、解説の〇◆さんです。」
「よろしくお願いします。」

「おぉっと！　いきなり先頭打者ホームラン！」
「完璧なバッティングですね。」
「〇◆高校、いきなり先制点、しかも初球から。」

＊

「うおっ！　凄いな！」

結果１－７で〇◆高校の勝利、

「ふう、そろそろ寝るか。」

第2話　転生

「お、ユウキ、寝るのか。」
「うん。」
「そうか…って何だあれは！」
「え、うわぁぁ！」

そこにはブラックホール的な物体が渦を巻いている、

「ユウキ！　逃げるぞ！」
「うん！」

と、全力で逃げたが吸い込まれた、
そしてきを失った、

＊

「おい、起きろ、ユウキ。」
「…ってここどこ！」
「ポケモンの世界だ、
とりあえずこの世界を楽しんでるわ。」
「父さん何言ってるの？」

父は出かけた、

「って完全にルビーの、あ、そうだ、鏡鏡。」

洗面所を探して鏡を見た、

「…完全に主人公じゃん！　…ということは。」

ユウキは上の方の道路に向かった、

「助けてくれー！」

「…やっぱりか。」
「…。」

そこに物静かな少年がいた、
姿は（ポケスペのエメラルド）の姿、

「君は？」
「ってその声はガッキーじゃん！」
「って栗杏かよ！」
「今は栗杏じゃなくて『杏』だよ、
やだな～、あの四天王のキョウと重なるなんて。」
「…本当にポケモンの世界なのか？」
「うん。」

「誰かー！　助けてくれー！」
「あ！　栗杏！　早く助けに行くぞ！」
「うん。」

第3話　お助け

「そこのバッグにモンスターボールが入ってる！」
「えーっと、あれ？　一つしか入ってないな。」
「とりあえず使わないと。」
「栗杏はいいの？」
「俺？　俺はいいよ、ゲームのポケモンがいるし。」
「…ずるっ！」
「いいから早く助けてくれー！」
「ああ！　はい！」

ジグザグマを倒しました、

「はあはあ、助かったよ、って君は隣のユウキ君じゃないか！」
「え？　何で俺の名前を知ってるんですか？」
「だってユウキ君の父さんジムリーダーだよ。」
「…マジかよ！」
「俺するから研究所に来てくれ。」
「はい。」

研究所に向かった、

「流石ジムリーダーの息子、お父さんの血が流れてるよ。」
「あはは、そうですか。」
「せっかくだからそのキモリあげるよ。」

「え、いいんですか？」
「いいんです！」
「…それ誰かのギャグですよ。」
こうしてポケモンをもらった。

第４話　告白！？（前書き）

お知らせ、今日から一日一更新できなくなります、
できれば毎日更新したいのですが・・・

第４話　告白！？

俺たちは研究所を後のした、

「あ、そうだ、栗杏。」
「何？」
「家とかあるの？」
「…ない。」
「じゃあ俺の家に泊まれよ。」
「いいの？」
「うん。」
「わかった、ありがとう。」

その日の夕方、

コンコン

ノックする音が聞こえた、

「は～い、どなたですか。」
「えーっと、春川えす。」
「春川？　…ああ、博士の子どもか。」
「うん、でちょっとこっちに来て。」
「え？　何で？」
「じゃあ俺も行こう。」
「あなたはだめ。」

「えー。」
「とりあえず行くよ。」
「じゃあ何か作っとくから行ってきていいよ。」
「うん、行ってきます。」

＊

連れて来られた場所は道路の少し外れの辺りか、

「で、話しって？」

「えーっと、あの、『付き合って下さい！』」
「……はあ！？」

お互い顔を真っ赤にしている、

「…どうなの？」
「まだ早いよ、友達から始めよう。」
「…うん！」

＊

そして、家に帰った、

「で、何だったの？」
「言えないよ。」
「ふーん、まあ、その内わかるよ。」
「…わかった！　わかった！　言う言う。」

ユウキは危険を察知したのか言い始めた、

「告白されたんだよ！」
「何で言ったの？」
「何と無く、誰にも言うなよ！」
「うん、言わない。」

「よし！　絶対だぞ！」

第5話　緑流（ミツル）とモスギス

現在の手持ち

ユウキ

キモリ　ポチエナ

春川

アチャモ　キャモメ　ケムッソ

栗杏

サザンドラ　ブラッキー　クレセリア

ドラピオン　サンダース　ウルガモス

＊

俺たちは透過（トウカ）シティに来た、

そして、ジムに入った、

「お、ユウキ、もう来たのか。」

「え？　父さん知ってるの？」
「ああ、博士から聞いたよ。」
「ふーん、そこの二人は誰？」

そこには緑の髪の大人しそうな人と紫のシルクハットの人がいた、

「どうも　もす　です　モスギスです、覚えたら私とゲームボーイしましょう。」
「僕は緑流です。」
「はあ、緑流はともかくそこのもすは変な人だなぁ。」
「なにぬねのっ！　変でござるとっ！　Ｉａｍは普通です！」
「いや、変だよ、どう見ても。」
「そうですか…しょぼぼん。」
「ユウキ、彼はとても優秀なトレーナーなんだよ。」
「本当に？　まさか！　ははははは！」
「じゃあ私とバトルです！　ですに落とし入れるです！」
「やめなさい、まだ初心者だぞ、彼らは。」
「え？　俺初心者じゃないですよ、信用しないならバトルでフルボッコにしてみせます。」
「じゃあ私と勝負のボウルです！」

モスギスと栗杏は外に行った、

「あのー、僕親戚の家の行くんですけど一人じゃさびしくてポケモンと一緒なら安心できると思うんです。」
「…分かった、ユウキ、ちゃんと捕まえられるか見てあげなさい。」
「うん、分かったよ。」

ユウキと緑流は近くの草むらに向かった、
その途中・・・

「キャー！　もうやめてー！」

サザンドラが龍の波動でモスギスのズルズキンをお星さまに、
さらに大文字でキリキザンを焼き尽くす、

「…本当にフルボッコにしやがった、つえぇ。」
「あの人は強いですね。」
「さあ、俺は知らないよ、とりあえず捕まえに行こう。」
「はい！」

第6話　ポケモンハンターＪ

ユウキと緑流は近くの草むらにきた、
何かの集団が何かを探してるようだ、
急にユウキは小声で言った、
「おい、隠れろ。」
「あ、うん。」
「ここにいたはずだ！　探せ！」
「「「はっ！」」」
正直二人とも怯えている、
そこに何かのポケモンが来た、
「あ、えっと。」
「何だ？　このポケモン。」
ユウキはポケモン図鑑を開いた、
名前は『ラルトス』らしい、
そして緑流は何かを言い始めた、
「あ、あの、僕このポケモン捕まえます。」
「お！　じゃあそうしよっか。」
そこにとても怪しい女性がきた、
「おい！　そこのお前ら！　そのポケモンをよこしな。」

「え。」

二人は一気に震え上がった、
後ろにもメンバーが複数いる、

「どうするんだよ、緑流。」
「え、えーっと。」

Ｊがさらにプレッシャーをかける、

「さあ、お前たちはそのポケモンを渡して自由になるかそのまま牢屋に直行か。」
「おい！　緑流！」
「えーっと、えい！」

緑流がラルトスに向かってボールを投げそのまま捕まった、

「・・・・・・・お前ら、こいつを捕まえろ！」
「「「はい！」」」

「逃げるぞ！」
「はい！」

第7話　お助けフローゼル

「ボーマンダ、龍の波動。」

ボーマンダが技を繰り出す、

「うわわっ！？」

ユウキたちは必至に逃げる、

「諦めの悪いやつらだな、ボーマンダ！　火炎放射！」

周りが火事になり身動きがとれなくなった、

そのとき誰かが来た、

「キキィィィ！　お助け漬物石の石は結構硬いのどうも　もすです。」

「あ！　モスギスさん！　助けてください！」

「はい・・・・・・・あ。」

ユウキは殺気に襲われた、

寒いというか、絶望というか・・・・・・

「これはうっかり、さっきの戦でもう戦えないでござるだったー。」

「・・・・・・・@%&#¥？＋N！！？！」↑奇声

「ふん！　そいつも役立たずみたいだな！」

「こんのやろぉぉぉぉぉぉ？　こうなったらムダな抵抗だぁぁぁぁ！？？？」

「破壊光線。」

その時、ユウキにボーマンダの破壊光線が襲い掛かる、

「モスギスさんの漬物石ガード！&アターーーーーック！」

何故かモスギスが持っていた漬物石？　でガード、さらにボーマンダを撃ち落とした、

「・・・・・ありがとうございます。」

「これは驚いた、まさかこんなことになるとわね、だが！」

ボーマンダが何か技を出そうとしている、そしてモスギスがこう言った、

「あ、流星群だ。」

「流星群？　なんかよくわかんないけどやばそう・・・・・。」

注！　緑流もいます！

「そう！　やばいか　やりいか　や☆ら☆な・・・・。」

「んなこと言ってる場合かぁぁぁぁぁ！！！」

「そうですね、ああ、愛しのヒーロー様はまだか・・・・・。」

「まさか、もう俺ら終わりなんですかね・・・・・。」

そんなさなかボーマンダに星のような物が飛んできた、

「何事！」

さらに水技で回りの炎を消す、

そこにはフローゼルが立っていた、

第7話　お助けフローゼル（後書き）

書きかけです、またすいません、気長にお待ちください・・・・、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4389x/

ユウキの転生物語

2011年11月17日21時43分発行